

「お供え」やめ、息子出てきた



「引き出し」ビジネス ④

親が変われば家族関係変化

をきちんと渡す……。教室で学んだことを続けるうち、少しずつ息子の様子が変わってきたという。

60代の母親が静かに話し始める。長テールを囲む他の父母たちが目を潤ませた。山口県宇部市のNPO「ひきこもりのリアル」が毎月開く「ひきこもりの子」がいる家族のための教室。この日は父母ら10人ほどが集まっていた。

山根さんは精神科の元看護師。「行政の窓口や保健所に相談しても話を聞いて終わる」「精神科の医師に相談したら、本人を連れてこいと言われた」。ひきこもりの家族に共通する悩みを知り、2015年から、当事者や家族の支援を本格的に始めた。

講習を受け、ひきこもりのメカニズムや対話の方法、暴力行為への対処の仕方などを学ぶ。いじめ、パワハラ、不器用でコミュニケーションが苦手……。ひきこもるきっかけは人それぞれだが、そんな環境にあらがうことも、迎合することもできず心を閉ざしていく。

「でも、それは決して人より劣ることも恥ずかしういことでもなく、その人の良みである」と家族が納得できた時、かける声のトーンも違って響く。「ドアの向こうで、子はその変化に敏感に気づく」という。

「傷ついた心をゆっくりとメンテナンスすることで、次第に心にエネルギーが蓄えられていく。すると人は自然に外に出たくなる」。これまで300人以上の当事者や家族と接してきた山根さんの確信だ。強

引に部屋から連れ出す「引き出し業者」のやり方は「家族との関係性を取り戻すことが回復への第一歩」とする山根さんの考え方は根本から異なる。

講習後はグループに分かれて毎月集まり、状況を報告し合う。長年ひきこもっていた人の回復にはそれ相應の時間が必要で、長い道のりを家族同士で支え合う。基礎講習の参加費はテキスト代を含め2万円。毎月

の家族教室は年会費5千円でもいいつも参加できる。神奈川県の会社員藤原秀博さん(43)は、中学でのいじめがきっかけで不登校になった。1年遅れで進学した高校にもなかなか通え

ず、20代半ばごろまで断続的にひきこもった。「自分にはひきこもることこそが解決策だった。波におぼれそう、浮石につかまって体を支えている感じです」。今は警備会社に勤めながら、ひきこもり問題のカウンセラーとして活動する。自立支援業者による被害を聞かされた胸が痛むという。「弱り切っていたあの時期

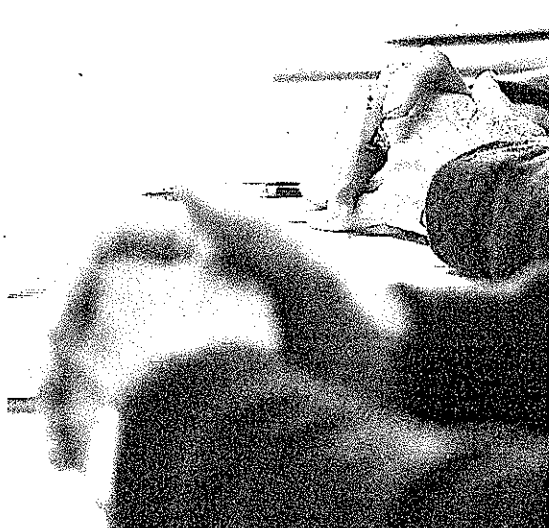
に、他人にひきこもっていることを責められたら、きつと自分も心がつぶれた」。自身は体重が今の倍近くまで増えるなど「とことんまでひきこもったから」このままではいけない」と気づけた。「掃除、ストレッチ、瞑想……。少しずつ行動範囲を広げ、同じ悩みを持つ当事者の集まりに出るようになり、就職もできた。

だがそれも一進一退。「少しずつ自分の特性を知り、人に会う機会が少ない警備の仕事を選んで続けながら、苦しさを解放するコツを身につけていった」。ひきこもり。その言葉に親たちは正体の知らない恐れを抱く。「そこにつけ込むのが引き出し屋。つまりは不安ビジネスだと思っ」と藤原さん。「今はひきこもっていても、その人だけのかげがえのない人生を生きている。ひきこもりのことなど実はよく知るところもない業者は法外なお金をとられ、上から目線で人生を否定されるいわれはないはずだ」

（高橋淳）

おわり

もう何年も姿を見せない息子。「それが先日、自ら部屋を出て、親子で食事をしたんです」。60代の母親が静かに話し始める。長テールを囲む他の父母たちが目を潤ませた。山口県宇部市のNPO「ひきこもりのリアル」が毎月開く「ひきこもりの子」がいる家族のための教室。この日は父母ら10人ほどが集まっていた。



子どものひきこもりに悩む親たちの集まりには、老夫婦の姿もあった。山口県宇部市、藤原正真撮影

報告をした母親は、2年前から教室に通う。息子の部屋のドアの前に食事を置く「お供え」を止め、「ひきこもる声」をかける。部屋から出てくる気配に気付いても普段通りに振る舞う。小遣い

「意見、情報をお寄せ下さい」(メールは、tokun houbu@asahi.com)。

「意見、情報をお寄せ下さい」(メールは、tokun houbu@asahi.com)。